

令和6年度
厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

手話療育に必要な指導者養成の教材等に関する研究

研究分担者 阿部敬信 九州産業大学

研究協力者 池田亜希子 明晴学園

研究要旨

本分担研究は、「ろう児の思考スタイル」に応じた手話療育体制の整備に資する知見を得ることを目的とし、「ろう乳幼児に対する保護者の言葉かけ」、「ろう乳幼児に対する絵本の読み聞かせ」、「ろう乳幼児を対象とした発達のアセスメント」について調査した。その結果、発達支援においては、CLやNM等を豊富に用いることが重要であることが示唆された。

A. 研究目的

本研究は代表者研究では、早期から手話言語を習得できる体制整備を目指し、そのことに必要な事項を明らかにすることを目的として行われている。本分担研究では、挙げられている目的の一つである「2. 手話療育、補聴の科学的知見及びこれらに係る技術的進歩の整理・情報提供ツール作成: 知見を整理し、養育者と支援者（保育園、言語聴覚士、耳鼻咽喉科医、ろう学校教諭等）に、WEBサイトや動画を用いて、乳幼児の発達全体を踏まえた手話とコミュニケーション発達についての情報を提供する」ことにある。我が国においては、自然言語としての手話である日本手話を用いた超早期からの介入や支援は東京都品川区の明晴プレスクールめだかのみであった。明晴プレスクールめだかは、2017年に学校法人明晴学園が児童発達支援事業所として設置した。日本手話と日本語のバイリンガルろう教育を実践している明晴学園（特別支援学校（聴覚障害））の乳児クラス（0・1・2歳児対象）が積み上げてきた実践を引き継ぎ、児童福祉施設

としての事業化がされた。2024年度からは早期支援の目的を、それぞれに絞り込み、さらなる充実と発展を目指して「早期支援プログラムめだか」と「幼稚部プレスクールめだか」と2種類のプログラムに分けて支援を提供するようになっている。「目の子ども」であるろう児に、視覚言語である日本手話による豊かな言語環境を切れ目なく提供することにより、ろう児のもつ可能性を最大限に引き出す発達支援プログラムが設定されている。

本分担研究では、明晴学園プレスクールめだかでの「ろう児の思考スタイル」に応じた発達支援を参考にしつつ、ろう乳幼児の発達支援の具体的な内容を明らかにすることによって、手話療育体制の整備に資する知見を提供することを目的とする。

なお、本報告書では、日本手話を母語する聞こえない子どもをろう児とする。聞こえる子どもを聴児とし、聞こえる大人を聴者とする。

B. 研究方法

本科研1年次となる2023年度における分担研究では、明晴プレスクールめだかでの半構造化インタビュー調査等の調査を行ったところ、手話療育において「ろう児の思考スタイル」を基本としたアプローチが必須であり、手話療育の指導者にはそれを実践レベルで適用できる能力が必要とされることから、手話療育の指導者を養成するための教材や実習のあり方、アセスメントの開発などが必要であるとされた。

そこで、次のような調査を行った。

(1) ろう乳幼児に対する保護者の言葉かけに関する調査—特に0歳から2歳未満の段階

まず、予備的な調査として、聴児の乳幼児に対して聴者の保護者は実際にどのような言葉かけをしているのかを、5名の子育て中の保護者を対象として、半構造化インタビューを行った。なお、調査の実施にあたっては、調査対象者に対して、口頭と文書にて倫理的配慮事項の説明を行い、研究参加同意書をとった。

(2) ろう乳幼児に対する絵本の読み聞かせに関する調査

手話親会（主に関西地区で、手話でろう児の子育てをしている保護者の任意団体）の12月講演会「日本手話を通して日本語を習得する工夫」及び意見交換・交流会への参加や先行研究の文献による調査を行った。

(3) ろう乳幼児を対象とした発達のアセスメントに関する研究

聴児に対する発達アセスメントをいくつか取り上げ、ろう児に対して用いる際の留

意点について日本手話ネイティブのろう者であり、ろう乳幼児の発達支援を長年実践してきた研究協力者である池田亜希子氏と検討を行った。

C. 研究結果・考察

(1) ろう乳幼児に対する保護者の言葉かけに関する調査—特に0歳から2歳未満の段階

研究対象者5名の属性については表1のとおりであり、いずれも母親であった。

表1 研究対象者

略	所属	回答時間
A	子育て支援拠点	13分4秒
B	子育て支援拠点	14分41秒
C	幼稚園就園前クラス	14分45秒
D	幼稚園就園前クラス	14分37秒
E	幼稚園就園前クラス	24分1秒

半構造化インタビューの質問項目は、過去の育児場面をインタビューアーが設定した上で、インタビューイーが過去の自身の発言を想起して回答できるように、表2のとおりとした。

表2 質問項目

出生後から1歳半の子育てを振り返り、お子さんに対して、どのような場面でのどのような言葉かけをしたのかを話してください。

例えば、おむつを換える際に、どのような言葉掛けをしましたか。

他の場面、例えば、授乳の場面、お風呂の場面、食事の場面、就寝の場面、衣服の着替えの場面、何かをじっと見ている場面、歯磨きなどの整容の場面では、どうでしょうか。

各インタビューの回答を録音し、録音デ

一タからスクリプトを作成し、そこから各子育て場面ごとに子どもへの発言を抽出した。さらに発言の意図に基づいて分類ラベルを貼り付けた。分類ラベルの貼り付けについては、子育て支援拠点の保育者経験44年の保育者と協議をして行った。

その結果、具体的な言葉かけとして197の母親の発言が抽出された。これらの分類ラベルは表3にある9となった。

表3 分類ラベルと母親の発言例

分類ラベル	母親の発言例
目の前の状況の報告	「おしっこ、いっぱい出ているね」
相手の気持ちの推定	「そろそろ、おなか、空いたね」
これからすることの予告	「これから(オムツ)替えるよ」
自分の気持ちの報告	「よくがんばりました」
おもちゃ等の擬人化	「お人形さんいるよ。こんにちわしている」
目の前の事物の命名	「雲」「太陽」「家」
これからすることの促し	「足、開いて」「次、がんばろう!」
相手に対する問いかけ	「どう?」「ばあ!」「やってみる?」
過去の出来事の報告	「今日はOOして、OOしたね」

母親は、言葉がまだ理解できない段階であることが分かっているにもかかわらず、乳幼児とのさまざまな生活場面で、言葉をかけて、コミュニケーションをとろうとしていること、そして、発言に対して、少しでも表情や喃語などで反応があった際には、我が子とのコミュニケーションが成立した喜びをもつことができ、次の言葉かけの動機付けとなっていた。特に保護者AとDはオノマトペを多用したり、言葉にリズムとメロディーを付けたりして言葉かけをしていた。それについて保護者Dは「お歌とか音が好きなようだったので、気を引く効果があるんじゃないかな」「自分も楽しくなる」と述べていた。

ろう乳幼児に対して、ろうの保護者が、実際にどのような言葉かけをしているのかに

ついては次年度に調査を行う予定である。明晴学園プレスクールめだかでは、研究協力者が中心となって「コミック版「語りかけ」育児-0~4歳わが子の発達に合わせた1日30分間」を参考にして、ろう児への「語りかけ」について、「ろう親向け」と「聴親向け」に、それぞれ注釈を付けることを行っている。それには、手話におけるオノマトペである Classifier ; CL や、顔の表情を用いる文法マーカーである Non-Manuals ; NM を用いたり、「ゆっくりした手話」や「手話リズムを使った替え歌」によって「語りかけ」をしたりすることが示されている。

(2) ろう乳幼児に対する絵本の読み聞かせに関する調査

手話親会の12月講演会「日本手話を通して日本語を習得する工夫」及び意見交換・交流会に参加し、ろう児の子育てにおいて、日本手話によって書き言葉としての日本語学習を進める際の工夫等が3人のろう保護者によって語られた。講演の中で共通していたことは、読解プリント教材であれ、絵辞典であれ、ろう児がその教材に興味をもって、その教材を介しながら、楽しく手話によって対話をしながら日本語を使っていくことが大切にされていたことである。ろう児が主導権をもって、手話による対話を重ねていく、そして、日本語を使った活動を進めていくことによって、日本語リテラシーが育まれていくことが語られていた。その一つとして、手話による絵本の読み聞かせも紹介されていた。講演の中で、ろう児が好む絵本の選び方や絵本の読み聞かせ15の原則について語られた。それは、Schleper, D. R. (1997) の Reading to Deaf Child-

ren: Learning from Deaf Adults.からの引用であった。それを表4に示す。

表4 15 principles for reading to Deaf children (Schleper, 1997)

1. Translate stories using American Sign Language.
2. Keep both languages (ASL and English) visible.
3. Elaborate on the text.
4. Reread stories on a “story telling” to “story reading” continuum.
5. Follow the child’s lead.
6. Make what is implied explicit.
7. Adjust sign placement to fit the story.
8. Adjust the signing style to fit the story.
9. Connect concepts in the story to the real world.
10. Use attention maintenance strategies.
11. Use eye gaze to elicit participation.
12. Engage in role play to extend concepts.
13. Use ASL variations to sign repetitive English phrases.
14. Provide a positive and reinforcing environment.
15. Expect the child to become literate.

これは、3月にボストンで開催された2025年EHDI学会(2025 Early Hearing Detection & Intervention Annual Conference)のSession “Read to Me: Story-Sharing with Deaf and Hard of Hearing Children”に、研究協力者が参加した際においても、この原則を用いた実践が

紹介されていた。

(3) ろう乳幼児を対象とした発達のアセスメントに関する研究

ろう乳幼児の言語環境や成長・発達はとても多様な実態がある。そのため、アセスメントは重要である。研究協力者によると、テキサス州立聾学校やメリーランド州立聾学校では、手話の習得については Visual Communication and Sign Language Checklist (VCSL) が用いられているとのことであった。既に日本語版が開発中であるとのことであった(矢野・松岡, 2024)。

ろう児の認知等の発達については、国内にはないが、スクリーニング的に用いることができる質問紙検査としては、乳幼児発達スケール(KIDS)(三宅他, 1987)と、園児用発達チェックリスト(安梅他, 2007)について、個別発達検査については、Bayley-III乳幼児発達検査(中澤他, 2023)についてろう乳幼児への適用を検討しているところである。いずれにしても、言語発達領域については手話の表出と理解に置き換えて、検討する必要がある。乳幼児の手話習得では、特に早い段階からNMの習得が見られるようであり、これをどのように扱っていくか、また「ろう児の思考スタイル」に沿った検査提示をどのようにするかが、今度の検討事項である。

D. 結論

ろう乳幼児の発達支援における具体的な事項である「ろう乳幼児に対する保護者の言葉かけ」、「ろう乳幼児に対する絵本の読み聞かせ」、「ろう乳幼児を対象とした発達のアセスメント」について、現時点での調査

結果を示した。「ろう児の思考スタイル」に応じた発達支援としてCLやNM等を豊富に用いること、それが、指導者養成における事項として重要であると示唆された。

E. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

なし